

ソキダク・ソコバ・ソコラ（その一）

我 妻 多 賀 子

一、はじめに

前号で私は、副詞のココダ・ココバ・ココラを取り挙げ、その意味・用法について考察を加えてきた。（注1）そこで、まずその結果を簡単に振り返ってみることにしたい。この三語はいずれも、意味的には、自分の身近な領域、すなわちウチに属するものに関し、その量が多いこと、あるいは程度のはなはだしいことを述べる点で一致していた。よって、コはこ（此）の意、ダ・バ・ラは量・程度について言う接尾語と認められる。また、これらのうち、ココダ・ココバについては、それぞれ下記のように、派生語が見られた。

ココダ……………ココダク・コキダ・コキダク・コキダシ
ココバ……………ココバク・コクバク・コキバク（注2）

ココラに派生語が出て来なかったのは、ココラという語そのものの用法範囲が広く、ココダやココバの派生語が表現していた用法を、ココラ一語で十分に示し得ていたからであろう。

ところで、この三語の大きな相違は時代的な面にある。すなわち、ココダは、用例が上代にしかなく、ココバは派生したココバク・コクバクを除いて、これ又ほとんど用例が上代作品に使われていた。一方、ココラは中古

になつて初めて見え、近世に成つた『書言字考節用集』にも項目が掲げられていた。(注3)
右の事実から推して、これら三語は

ココダ ↓ ココバ ↓ ココラ

という順に発生してきたものではないかと思われる。
以上が、前号で記した調査結果のあらましである。

ところで、ここで見られた、接尾語タ↓バ↓ラの時代的推移は、他の語の場合にも認められるものであろうか？
この点について、さらに調査を進めるべく、とりあえず今号では、ココダ・ココバ・ココラなどのコ系の語に
対し、ソ系の語について見ていくことにしたい。

二、ソキダク

まず、接尾語タのついたソ系の語と言うと、コ系の場合の実例にしたがえば、左のような語の存在が考えられる。

ソコダ・ソコダク・ソキダ・ソキダク・ソキダシ

そこで、これらの語がはたして本当に用いられていたのかどうか調べてみたところ、ソ系の場合、接尾語タを伴うものは、これら五つのうち、わずかにソキダク一例のみであつた。とりあえず、その例を掲げてみることにする。

○海人小舟 はららに浮きて 大御食(おほみけ)
に 仕八奉(まつ)ると 遠近(をちこち)に
漁(いざ)り釣りけり そぎたくも「曾伎太久毛」
おぎろなきかも こきばくも「口伎婆久母」 ゆ
たげきかも 此(こ)こ見れば うべし神代ゆ
始めけらしも 八万葉・二〇・四三六〇V

右の長歌を通釈すると「海人小舟は点々と浮かんで御膳の用に差し上げようとあちこちで漁り火をたいて釣りをしていゝ。あんなにも広々としていゝことか、こんなにも豊かであることか。この様子を見ると、神代からここに都をつくり、御殿を営まれたのも、もつともなごとと思われ」となる。難波の宮造宮のことをほめたたえた大伴家持のこの歌では、ソキダクが係助詞を伴い、形容詞の「おぎろなし」にかかつていゝ。「おぎろなし」は耳慣れない語であるが、欽明紀六年の条の「造丈六仏

功徳甚大」の「甚大」の古訓に見られるオギロナリが形容詞化したものと言われる。「おぎろ」は「広大なこと」

「なし」は状態を表す語について活用形容詞をつくり、「はなはだしい」の義を示すので、結局「おぎろなし」は、「非常に広大だ」の意味になる。なお、この語は、いわゆる漢文訓読語で、他に用例は余り出て来ない。

ソキダクは係助詞を伴うことで、より感動の意味を強め、この「おぎろなし」を修飾し、「あんなにも広々と」と、海原の広大さを述べる副詞として使われていることになる。

そして、注意すべきなのは、この歌では、ソキダクモのすぐあとに、コキバクモという語が出て来る点にある。この場合コキバクは、やはり係助詞を伴い、「ゆたけし」という形容詞にかかっている。「ゆたけし」は、言うまでもなく、「ゆたか(豊)」「から生じた形容詞で、同種の語構成のものに、「あきらか(明)」「↓「あきらけし」、「さやか(分明)」「↓「さやけし」、「のどか(長閑)」「↓「のどけし」などがある。

ここの「ゆたけし」は、海の広さと貢ぎ物の豊富なことを合わせ表していて、コキバクモという語を上を持つて来ることで、一層その広さや豊かさを強調していることになる。

つまり、ソキダクもコキバクも、それぞれ下に来る形容詞を、より強めて言いたいがために使われた副詞ということになる。ただ、ここで同じ語を用いず、一方にソキダク、もう一方にコキバクを使っているのは、それほど意図的なものではないように思われる。

ソ系の語と言うのは、話し手と聞き手が共通に認識している物・事を指示する語で、コ系の語のように、話し手の領域内に属する物のみを指し示すものではない。

したがって、形容詞「おぎろなし」にソ系の語、「ゆたけし」にコ系の語を使っているのは、これと言って特別な意味があることは思えない。この長歌では他にも

山見れば 見のともしく ↓ 川見れば 見のさやけく

朝なぎに 梶引き上り ↓ 夕潮に 棹さし下り

など対句的用法を巧みに取り入れている。おそらく、この部分の「ソキダクモ おぎろなきかも ↓ コキバクモ ゆたけきかも」も、同じように、対句として書き記した一種の修辭と考えていいのではないだろうか。いずれにしろ、ソキダクやコキバクを使っていることから、当時、量(量)の多さや程度のはなはだしさを述べるこ

の種の副詞は、いくつが存在していたことが想像される。以上、接尾語タを伴ったソ系の語は、ソキダクのみが出て来たが、これが『万葉集』に見えていたので、時代的には上代の例ということになる。その点では、コ系の語のココダ・ココダク・コキダ・コキダク・コキダシもすべて上代に見られたので、接尾語タは古い時代のものであったと言ってもよさそうである。

続いて、接尾語バを伴ったソ系の語について考察して見ることにはしたい。

三、ソコバ・ソコバク・ソクバク・ソコソバク

コ系の場合、接尾語バを伴った語は、ココバ・コキバク・ココバク・コクバクと四つ見えていた。これをソ系に調べてみると、ココバに対するソコバ、ココバクに対するソコバク、そしてコクバクに対するソクバクの三つは用例が存していた。ただ、コキバクに対するソキバクだけは、実際に使われている例が見つからなかった。その代わり、コ系の時には出て来なかったソコソバクという新しい言い方が出て来た。

要するに、接尾語バを伴うソ系の語には、ソコバ・ソコバク・ソクバク・ソコソバクの四つが見られたので、

以下、この順に見ていくことにしたい。

*ソコバ

ソコバは『万葉集』に二例出て来る。

○葉根纒（はねかづら）今する妹は無かりしをいづれの妹そ幾許（そこば）恋ひたる「幾許恋多類」

△四・七〇六▽

○秋の葉の にほへる時に 出で立ちて 振りさけ
見れば 神柄（かむから）や 許多（そこば）貴
き「曾許婆多敷刀伎」 山柄や 見が欲しからむ

△一七・三九八五▽

右はそれぞれに「ハネカズラを今する女はこちらにはいませんが、何処の方をそんなにひどくあなたが恋されたのでしょうか」「秋の黄葉の色づく時に出て立って振り仰いで見やると、領する神の格のせいか非常に尊く、山の格のせいかたいへん人を引き付ける」と解釈することが出来る。

ソコバは初めの歌では、下の「恋ひたる」にかかり、また、二番目の歌では形容詞「貴き」を修飾し、いずれも程度の強さを述べている。その点では、自分の領域内

のことについて言うか言わないかの違いはあるが、この二首のソコバは、前号で見たココバと同じ意味・用法のものと言える。総じて、ソコバは余り使われていず、他には左記の訓点資料の例がある。

○ 无量ノ仏ニ逢ヒタマヘリ、何ゾタダ爾許(ソコバ)ノミナラムヤ。 △金剛般若経讀述・八V

右の例では、ソコバは程度のはなはだしさというよりも、量の多さについて、それを明示せず「それくらい」「いくらか」の義を示していると見た方がよさそうだ。

なお、『古訓点の研究』(春日政治著)によれば、これは嘉祥年間につけられた訓点の例なので、西暦では八四八年から八五一年ということになる。そこで、接尾語バを伴ったソコバの例も、ココバが『万葉集』に三例出て来ただけだったのと同じく、やはり上代、あるいは平安時代初めの文献にのみ、その例が見られたことになる。以上、ソコバについての考察を終了し、続いて、ソコバについて見ていくことにしたい。

*ソコバク
ソコバクのクは、コクバク・ココバク・ソキダクのク

と同じ副詞語尾である。先に述べたように、ソコバの用例は上代作品に限られていた。

ところで、ココバが上代の用例しか見られなかったのに、ココバは中古以降も出て来たが、それと同じ関係が、ソコバとソコバクの間にも認められるであろうか。ソコバクについても、以下、古い順に見ていくことにする。まず、上代文献におけるソコバクの例として、左に『日本書紀』の例を挙げることにしたい。

○大錦冠(だいきむのかうぶり)を以て、中臣鎌子達に授けて内臣(うちつおみ)とす。封(へ)ひと増すこと若干(そこばく)の戸(へ)と云云(しかしかいへり)。 △紀・孝徳即位前V

この例で、「若干」をソコバクと訓んでいるのは、『日本書紀』北野本の訓である。したがって、これは上代の例と考えてもよいように思われる。「若干」は音読すれば、ニヤカンもしくはニヤツカン。現代語では、ジャツカンとよみ、「わずか、少し」を意味する。

しかし、ソコバクと訓んだ場合、少なくともこの『日本書紀』の例では、數量を明らかにせず、おおよそのところを述べる時に、「それくらい」「いくらか」の意で

用いたものであろう。つまり、先にソコバの時に見た訓点資料の例と同じ意味・用法のものと思われる。

そして、この「それくらい」「いくらか」の意を示すものは、実はソコバクの場合にも、左のように訓点資料の例が見える。

○爾許（ソコハク）

△四分律行事鈔▽

○中間に許（ソコバク）の時に違ひて、大乘を教へしが故に、我れ本城に住（とど）もれり。

△法華經玄贊・六▽

○人（ワレ）ヲ頻ニ作許（ソコハク）ノ叮嚀トシテ

△遊仙窟▽

○五嫂如許（ソコハク）大人（オホキナレハ）

△遊仙窟▽

右に挙げた例は、いずれも平安時代の訓点なので、おおよその数を言う場合、中古に入っても、ソコバクと言う語を用いていたことがわかる。他に、この種の例と考えられるものを、いくつか挙げてみよう。

○源氏、殿上許されて、御前に召して御覽す。若干（そこばく）選ばれたる人々に劣らず、御覽せらる。

△宇津保・吹上下▽

○此レヨリ其ノ方ニ幾許（ソコバク）行テ闇魔王ノ宮有リ、大河（ダイガ）有リ。

△今昔・四ノ四一▽

○楚は韓よりそこばく東南なり。

△史記抄・四・秦本紀▽

右は三つとも、「それくらい」「いくらか」と解釈出来るソコバクで、時代的には中世にまで及んでいることになる。ただ、注目したいのは、これらの作品の中に、いわゆる純和文系の平安女流文学が一つも出て来ないことである。それでは、ソコバクは、和文作品には全く使われていなかったのかと言うと、これがそうでもない。つまり、「それくらい」などの、おおよその数を言うものとは違った意味のソコバクが、和文作品に見える。まず、『源氏物語』の例から見ることにしたい。

○そこばく挑みつくしたまへる人の、御かたち・有様をみ給ふに、御かどの、赤色の御衣（ぞ）たて

まつりて、うるはしう、動きなき御かたはら目に
なすらひ聞ゆべき人なし。 △源氏・行幸▽

右は、物見に出た玉鬘が「はなはだしく競つて華美を
凝らしていらつしやる人々のお顔立ちやお姿をごらんに
なるが、はた目に拝する冷泉天皇の赤色の袍をお召しに
なつて、端正で毅然としていらつしやる御容姿にお比べ
申すことの出来る人はいないのである」と感じるところ
で、ソコバクは「挑みつくす」にかかり、程度のはなは
だしさを述べている。したがつて、先のソコバの場合に
も、「それくらい」「いくらか」と解釈出来る例の他に、
もう一つ、程度のはなはだしさや量の多さを言うものが
見られたが、ソコバクにもこの二つの意味が存していた
ことになる。しかも、この程度・量について言うソコバ
クは、左に記すように、和文作品ばかりか、いわゆる漢
文訓読系の作品にまで、平安時代以降、盛んに使われて
いる。

○そこばくの捧げ物を木の枝につけて、堂の前には
てたれば、山もさらに堂の前にごき出でたるや
うになん見えける。 △伊勢・七七▽

○来年の司召などは今年この山にそこばくの神々あ

つまりて為(な)いたまふなりけりと見給へし。

△更級日記▽

○わたらせ給ふ程に、そこばく広き大路ゆすり満ち

△狭衣・三▽

○何(イカ)ニ況(イハ)ムヤ、无量劫(ムリヤウ

コフ)ノ間、四悪趣(シアクシユ)ニ墮(オチ)

テ、若干(ソコバク)ノ苦患(クグエン)ヲ受ケ

△今昔・一ノ二六▽

○故小野宮のそこばくの宝物・莊園は、皆この殿に

△大鏡・実頼▽

こそはあらめ。

△古本説話集・五二▽

○そこばくの女御、后を御覧じくらぶるに、みな土

△宇治拾遺物語・六ノ九▽

○よろこびてあみをおろして引きたりけるに、魚は

△古今著聞集・七〇八▽

○心にぬしあらましかば、胸のうちに若干(そこば

△徒然草・一三五▽

○中書王ノ御勢ハ、初度ノ合戦ニ若干(ソコバク)

△討(ウタ)レテ、又モ戦ハズ。

△太平記・一四・箱根竹下台戦事▽

右に挙げた例を見ると、十例中八例までが、格助詞ノを伴って連体修飾語として使われている。よって、これはソコバクの用法の特徴の一つと考えてよさそうだ。さらにもう一つ付け加えておきたいことは、左記のようにソコバクは古辞書にもよく掲載されていることである。

○若干 ソコハク 無限 同 △色葉字類抄▽

○若干・無限・多・介所・多少 ソコハク △観智院本類聚名義抄▽

○幾許 イクバクバカリ ソコバク △図書寮本類聚名義抄▽

○若干 ソコバク △文明本節用集▽

○若干・許多 ソコバク △明応五年本節用集▽

○若干・介所・許多 ソコバク △易林本節用集▽

右のうち、『図書寮本類聚名義抄』の例だけが、おおよその数を示す「それくらい」「いくらか」の意を示すもので、あとはすべて、量の多さや程度のはなはだしさを言うソコバクと考えられる。

以上、ソコバクについて、これまで述べてきたことを簡条書きにしてまとめ、次のソコバクに移ることにする。

①ソコバクは上代から用例が見え、中古以降も盛んに用いられている。

②意味的には、おおよその数を言う場合と、量の多さ・程度のはなはだしさについて述べる場合がある。

③おおよその数を言う場合、いわゆる平安女流文学には用いられない。

④実際の文献に出て来た用例数、および古辞書への掲げ方などから考えると、量・程度について言うソコバクの方が、おおよその数を言うものに比べて、断然多く使われている。

⑤用法的には、格助詞ノを伴って、連体修飾語として使用されることが多い。

*ソコバク

この語は、ソコバクの第二音節が母音交替した結果、

出来たものである。ところで、このソクバクがいつ頃から使われたかということだが、まず『日本書紀』の左の記事を見ることにしたい。

○冬十二月の庚辰の朔甲申（ついたちきのえざるのひ）に天國排開廣庭皇子（あめくにおしはらきひろにはのみこ）、即天皇位（あまつひつぎしろしめ）す。時に年若干（みとしそこはく）。

△紀・欽明天皇即位前▽

右の記事で「若干」の部分、ほとんどの書紀の古訓はソクバクと訓じている。ただ、寛文版訓によると、ここはソクバクとなっている。したがって、これをソクバクの最古の例とする考え方もあるが、ソクバクと訓じている本があること、寛文年間ということ、かなり時代が下がっていることから、余り確かな例として、取り挙げることは出来ないように思う。そして、この唯一の『日本書紀』の例を除くと、ソクバクは実に、上代、中古と用例がなく、左に記すいくつかの例でわかるように、中世にならないと出て来ないのである。

○さればそくばくの業（ごふ）をもちける身にてあ

りけるを

△歎異抄・一八▽

○京都ノ強盜、徒（イタヅラ）二人ヲ殺シ、ソクバクノ物ヲ掠（カス）メ取り候事、不快ニ覺エテ

△沙石集・一〇本ノ六▽

○兆前（テウゼン）ノ勸文（カンモン）更ニ二事モ違（タガ）ハズトテ、実算（ジツサン）法印忽（タチマチ）ニ若干（ソクバク）ノ歎感（エイカン）ノ忠賞ニ預リケリ。

△太平記・三三・淡宮御位事▽

○邪見に、なさけなき様に候へ共、此御事、一人のゆゑにそくばくの者どもが皆非分の死を任り候はん事は不便に候へば

△御伽草子・中書王物語▽

○むねちかは、ちからなくて、そくばく損をしてわが宿へぞ帰りける。△御伽草子・弁慶物語▽

○谷のそくばく深き事、千丈余に及べり。

△謡曲・石橋▽

○此箱の内の明珠、十貫目の南鐐よりそくばくまさるべし。△仮名草子・伊曾保物語・上・一五▽
○夫無学より功者にいたる。程良（やや）久しうして其間に若干（そくばく）の貸財（くはさい）を滅す。△色道大鑑・五ノ二〇▽

を挿入したものではないだろうか。つまり、「どれほどの意を表すイクバクがイクソバクとなるのと同じ語構成と思われる。まず用例を掲げることになろう。

○午時許、タケキ兵(イクサ)ノソコソバクマウデ
キテ、毒ノヤヲモテ、ワレヲイル事的(マト)ノ
ゴトシ。
△法華百座聞書抄▽

○それをそこそばくの壁の料に汲むに水尽きもせず。
△古本説話集・四七▽

○参りあつまりたるそこそばくの道俗・男女声も惜
しまず泣きあひたり。△古本説話集・七〇▽

いろいろな文献に当たってみたが、ソコソバクは私の見る限り、右の三例のみが出てきた。最初の『法華百座聞書抄』は、正しくは『法華修法一百座聞書抄』と言い、他にも『百座法談聞書抄』とか『大安寺聞書抄』とも呼ぶようである。西暦一一一〇年二月二十八日から、ある内親王の発願で、毎日般若心経・阿弥陀経各一卷、法華経の一品を講じた時の説経の聞書で、計三百日間に及んだと言う。ただ、現存本は二十日分の説経が筆録されているに過ぎず、ほとんどは法華経を元にした話らしい。

なお、時代的には平安末期成立ということになる。

続く『古本説話集』は、和文体で書かれた世俗性の強い説話集で、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』との共通説話が非常に多いことで注目されている。その成立も丁度『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の間に位置しているらしく、はっきりはしないが、おおよそ一二一九年頃ではないかと言われる。したがって、この書も、平安時代末期に成ったことになる。

なお、意味的には、右の例でわかるように、ソコソバクは、すべて量の多さ・程度のはなはだしさを述べている。また、用法的には、多く格助詞ノを伴い、下に来る体言を修飾している点で、先に見たソコバクやソクバクと同じである。

以上のことから考えて、ソコソバクという語は、ソクバクが定着する中世初めまでのある一時期に、ごく限られた説話文学の世界で、ほんの短い期間使われていた語であったように思われるが、どうであろうか？

要するに、ソコバクを強めて言いたいがために、時間的には短い間、空間的にはきわめて狭いところで、造られ、そして用いられていた特殊な語であったのではないだろうか。

以上、量・程度について言う接尾語バのついたソ系の

語、ソコバ・ソコバク・ソクバク・ソコソバクの四語について考察を加えて来た。文献に出て来た実例から判断して、これら四語の使用期間をまとめて図示すると、左のようにでもなるであろうか。なお、——部分が、用例の出て来た時期を意味する。

ソコバ
—— 上代 中古 中世 近世

ソコバク

ソクバク

ソコソバク

さて、接尾語夕およびバを伴ったソ系の語について見て来たが、少なくともここまでは、コ系の場合と同じくタレバの時代的推移が認められる。最後にもう一つ、接尾語ラのついたソ系の語に関して述べなくてはならないが、今回はだいたい紙数も尽きたので、次号に回すことにし、大方のご叱正を期待して、この辺でひとまず筆を置くことにしたい。(注5)

注1

『学習院大学上代文学研究』第二十二号(平成九年三月三十一日発行)参照

注2

前号の考察では、うっかりしてコキバクを見落としてしまったが、用例が実際にあったので、新たに付け加えることにする。なお、全体の論旨にはほとんど影響はないと思うので、ご寛恕願いたい。

注3

『書言字考節用集』は一六九八(元禄一一)年成立。

注4

古本節用集では、ソコバクが「文明本」「明応五年本」「易林本」に、ソクバクは「伊京集」「天正一八年本」「饅頭屋本」「黒本本」とと截然と分けて掲げられている。ソコバク・ソクバクの両方が載っているのは、かなり時代が下った『書言字考節用集』のみである。

注5

今回参考にした底本は、公刊の索引類および岩波書店発行の日本古典文学大系本である。